

幸福と欲望の経済学——スタンダールと六千フラン

柏 木 治

はじめに

バルザックは『パルムの僧院』についての批評のなかで、この作品を称讃しつつも、ファブリスを物語の中心に据えるのではなく、大公とその息子、モスカ伯、ラッシ、サンセヴェリーナ公爵夫人、フェランテ・パラ、ロドヴィコ、クレリア、クレリアの父、ラヴェルシ夫人、ジレッチ、マリエッタといった人物を主要人物として、パルムの宮廷を舞台とする小説に書き換えるように進言している。^① ここにはふたりの小説家の体質に違いが見えて興味深い。バルザックが社会全体を浮かび上がらせるように小説を描くのに対し、スタンダールはひとりの個人に読者の視線が向かうような書きかたを好んだ。「わたしはフレスコ画を書きますが、貴兄はイタリアの彫刻をつくられた」と述べるバルザックの言葉が端的に表現しているように、『僧院』の作者が目指しているのはバルザックの作品にあるような社会的広がりではない。『人間喜劇』が意図していたのは基本的に群像劇的世界であり、濃淡はあるにせよ、それぞれの作品に登場する人物たちは社会的背景のなかにしっかりと根を下ろし、全体として厚みのある物語空間を構成すべく創造されなければならなかった。^② これに対しスタンダールの意図するところは彫刻作品のようにくっきりと立つ個人の造形であって、そのためには現実の社会の事情から多少飛躍してリアリティに欠けるところがあったとしてもそ

れほど氣にとめないのである。描くべき社会を個人が凌駕してしまふといつてもよいだろう。

ジュリアン・ソレルという人物が同時代の多くの批評家から理解不能と批判されたのも、現実的には考えにくい個人を造形したからであり、小説は事実を映す鏡であると嘯きながらも実際の平民階級の青年像から大きく逸脱し、スタンダール流に理想化した結果ともいえる。「一九世紀年代記」という副題どおりにこの時代の社会をつぶさに描こうとする作家なら、バルザックがおこなったように「金」は必須の主題として小説内に位置づけるだろう。ところがスタンダールの小説作品の主要人物たちは、副次的人物とちがって「金」の臭いがあまりしない。それぞれの置かれた社会的環境や状況に大きな差はあるが、彼らは一樣になにがしかの経済的保証が確保されているように見え、それほど苦勞せずとも金が降ってくるのだ。この時代、平民出身の名もない青年が最初に闘わなければならないのはいかにして金を得るかという問題であつた。にもかかわらず、ジュリアンはラテン語聖書を丸暗記する持ち前の記憶力のよさから相應の報酬をもらうことになるが、その金額を引き出したのはジュリアン自身の努力ではなく、父親の欲である。オクターヴは貴族であり、最初から金に苦勞している気配はなく、デル・ドンゴ家のファブリスは言うまでもないだろう。ブルジョワ階級のリュシアンにしても父親が大銀行家であり、リュシアン自身に金銭欲はほとんど感じられない。スタンダールにあつて金の問題は、ごく例外的な作品を除いて、つねに主人公たちを迂回する。彼らと金の関係は、属する階級によってその強度を下げられるか、あるいは周囲（この場合は父親）がそれを引き受けることによって、彼ら自身に切実な問題として直接降りかかつてこない。金との関係を引き寄せることによって出世し、これを自己実現の主要な要素とするのが一九世紀の特徴であるとすれば、スタンダールの主人公たちはそのような関係を最初から超越しているといつても過言ではない。

スタンダール個人の生活についてはどうか。じつは金銭への言及はそれなりにあつて、経済的不遇を託つことも少

なくないが、他の作家と比較してその程度や多寡を論じることは困難であろう。ただ彼に特徴的なのは、文学上の成功によって大きな富を手にするような夢はほとんど抱いていないこと、他方で芸術のために赤貧に甘んじるといった、若きロマン派にありがちな意識ももちあわせていないことだ。いずれも七月王政期に文学を志した新しい世代には大なり小なり見られる精神構造だが、スタンダールはこの両極のどちらにも振れることはなかった。金に関しては、適度な執着をみせつつ、しかしどこまでも「中庸」に留まろうとするかのごとく理性的にみえる。だが、保守的ともみえるこのような態度の背後には、スタンダール独自の経済思想や芸術家の生活の理想が見え隠れする。そしてこのような思考は、直接的ではないにせよ、さきに述べた小説内における主人公たちと金銭の薄い関係に投影しているように思われる。本稿ではそのあたりの事情に立ち入りつつ、この小説家と経済の関係を再検討してみたい。

(一) 年金の問題

スタンダールの書き物には「六千フラン」という金額がしばしばあらわれる。多くは日記や手紙、あるいは手稿の余白などに書きつけられたものであるが、旅行記など印刷されたテキストにあらわれることもある。この「六千フラン」という記述は、その具体性と一貫性のゆえに妙にわれわれの注意を惹く。彼にとってこの値は特別の価値をもっていたことはまちがいないだろう。これについては以前にも触れたことがあるが、ここでいま一度吟味しておきたい。³⁾

スタンダールが記している六千フランは、正確にいえばなんらかの報酬として得られる収入ではなく「年金」である。この点は重要で、年金である以上、自分がどのような状況に置かれていても原則として無条件に入ってくる金である。言い換えれば、あらゆるものから独立して自由であるための条件を付与するものだ。その金額を六千フランあ

たりに見積もるのはかなり早い時期からみられ、ナポレオン戦争に従軍してドイツにいたところに妹ポーリーヌに宛てた手紙のなかにもそれを見て取ることができる。フレデリック・アンシヨン（フリードリヒ・アンツイロン）の『一五世紀以来のヨーロッパにおける政治体制革命一覽』を買ったと述べ、それが「魂の飢餓」たる退屈に対抗するよき食料になると記したあと、つぎのように続けている。

お前がいれば、そしてもう一つ別の存在、つまり、お前と同程度に僕が愛する唯一のものである自由と一緒なら、こんなもの「アンシヨンの著書」は必要ないのだけれど。自由を得るために、辛いお仕えをしているのだが、文明化された時代には生活費のないところに幸福はない。パリだと六千フラン、絶対に必要なもの「……」⁽⁴⁾。

（傍点引用者）

ここではまだ「年金」ではなく、「辛いお仕え」の報酬としてもらう金額として登場しているが、早くも六千フランという金額は明示されている。重要なことは、自由を得るためにはその程度の金が絶対に必要だということ、愛する妹への手紙であることを考慮するとしても、自身の生活を最低限保証する経済的バックボーンがないと幸福はあり得ないときわめて常識的に考えている点である。当時の貨幣価値からして六千フランという金額はそれほど多いわけではないが、少ないといえるほどのものでもない。パリで誰からも邪魔されない、「自由」でそれなりに自立した生活をしていくうえで必要と彼が判断した金額だと考えてよいだろう。

スタンダールが父を激しく嫌ったことはよく知られているが、その原因のひとつは遺産として十分な金を残してくれなかったことであつた。小説作品のなかで金銭の問題が主人公たちを迂回していくように、自伝『アンリ・ブリュ

ラールの生涯』でも金の問題はベールにとって極力避けるべき話題として扱われている。「金はいわば嘆かわしい必要性であり、その役割は便所と同じで、残念ながら欠くことのできないものだが、けっして語ってはならないものがあった」⁽⁵⁾。ところが個人の金の問題が集中的に書かれる例外的な場合がある。父親との関係を書く場合だ。この自信においてアンリ・ベールの父に対する関係は純粋に金銭的であり、それはいくつか残されている自伝的断章にも共通している。「彼の父親は、世間一般の声に従えば、五千ないし六千フランの年金を彼に残してやるべきだった。が、その半分も残さなかった。だからベール氏は生活を切り詰めるべく努力し、それに成功した」⁽⁶⁾。三人称体のこの自伝的断片は、父の死（一八一九年）の翌年に書かれたものだが、三〇年代に記されたいくつかの断片にも同様の記述がみえる。⁽⁷⁾要するに、父への言及は金によつて媒介され、それは晩年まで一貫している。当時、親から受ける遺産は年金にするのが一般的であったから、スタンダールもまた同様のことを望んでいた。生活のためにあくせく働かなくてもよいように父が息子に一定の年金を残すことは父親としての義務であるにもかかわらず、自分の父はそれを履行しなかった（ここにも六千フランの額があらわれる）——スタンダールはそう考えていたのである。「破産する父親をもつことの不幸をこれほど身に沁みて知ったことはない」と友人マレスト宛に書いたこともあった。⁽⁸⁾

とはいえ、それは金満家のような贅沢な生活を欲してのことではなく、自由な生活を可能にする最低限の年金への望みからである。少なくとも彼は可能な限り時間を執筆に費やすことこそが自分の天職であり大義であると考えていた。したがって、それを実行することは正当であり、逆にそれを阻むものはどのような形であれ非難に値する。現代の読者からみてどれほど傲慢で我儘に映ろうが、スタンダールのなかでは立派に正当化されうることなのだ。

さて、ここでもう一度「六千フラン」に立ち戻ってみよう。これまで見てきたように、若いころから晩年にいたるまで、彼が生活に必要とする理想的な金額はほぼ一定している。『アンリ・ブリュラー』でも「一八〇四年、わた

しは百ルイと自分の自由を望んでいた。一八三六年、六千フランと自分の自由を情熱的に望んでいる」との記述がある。金額に若干の違いがでることもあるが、二〇歳過ぎのスタンダールと五三歳のスタンダールの金銭へのスタンスはまったく変わっていない。六千フランを大きく超えても「わたしの幸福にほとんど影響を及ぼさない」し、「何一つ管理しなくてすむこと」こそが自分にとっての幸福なのだから、もし土地や家屋から一〇万フランの年金を得たとしても、わたしはとても不幸になることだろう¹⁰という。「もし自分がろくでなしになるなら、今日、一八三六年に大金持ちになることだろう¹¹」と言い切るスタンダールにとって、幸福の源泉とはまさに「誰に対しても命令せず命令されないこと」にあった¹²。したがって「雇われ」の身であってはいけない。望ましい生活のありかたは随所に表明されていて、たとえばイギリスの雑誌への寄稿記事では、『グロブ』紙を「パリで成功するにはつまらなすぎる」と辛口の評価を下したあと、とはいえこの新聞は「フランスの若者のもつとも評価できる部分を代表している。つまり、生活のために労働を強いられない、そして親に八千から二万フランの年金のある者たちのことである¹³」という。もちろんスタンダールがいくぶんかの皮肉を込めて語っている点は考慮する必要があるが、彼自身の幸福観のなかでは、われわれにとっては当たり前前の「労働」という観念がきわめて薄かったという点は見過ごしてはならないだろう。

(二) 特権の夢想

こうした金に対する「適度な」執着は「特権」という奇妙な断章にも垣間見える。この文章は、ローマで晩年（一八四〇年四月一〇日）のスタンダールが実現不能な超自然的願望を書きつらねたもので、冒頭に「カミ(Cami)はわたしにつきのような護符を授ける」という文を置き、二三箇条からなる特権が述べられている¹⁴。「特権を得た人間が一瞬口に運んだ指輪を二分間、自分の身あるいは指につけると、望む時間だけ不死身となる。一年に一〇回、鷲の目を

もち、一時間に五里駆けることができる」(第八条) といった具合だ。¹⁵ そのなかに「ナポレオン金貨一枚と自分がいる国の通貨で四〇フラン」が毎朝二時にポケットに見つかるといふ「権利」が記されている(第九条)¹⁶。さらに第二条には、「特権者は、上記の特権による日々の六〇フランは別にして、いかなる金も稼ぐことはできない」とある。¹⁷ 「六〇フラン」とは言うまでもなく九条のナポレオン金貨(二〇フラン)と四〇フランの合計を指す。このように、一種の戯言とはいえ、スタンダールは死の二年前においてさえ、年金のごとく一定の金額が(六千フランよりはかなり多いが)天から降ってくることをまるで子どもの願ひ事のように書きつけていた。

ところで、この『特権』はカミから与えられる権利であつて、その効力は超自然的で絶大である。年に二〇回、特権者は二〇歩の距離にある自分の周囲の人間すべての考えを見通すことができたり(第二条)、年一〇回、一時間に百里の割合で好きな場所に移動できたりする(第二三条)。これほどの魔術的な権利が授けられるのであれば、たいていのことは実現可能で、長者になることも容易なはず。したがつて、「日々六〇フラン」の金が手に入ることなど条項に入れる必要もなかつたろうと思われるのだが、これをわざわざ書いてある点にこそ注目しなければならぬ。ここでもスタンダールの望みは富裕者になることではなく、ただ作家として自立する生活の保証をカミから与えられることなのだ。過大でもなく過少でもない一定額——それは一九世紀という時代に生きなければならぬ、一八世紀の心性を多分に持ち続けていたスタンダールという作家の行き着いたひとつのミクロな経済的結論でもある。「フランスにおいては、自身もしくは父親が千エキュの年金をもたない者はすべて、わたしの目にはプロレタリアーに他ならないと映る。マレストは雇われになる必要に誘惑されている」¹⁸ という文章が端的に語っているのは、この時代にあつて年金(ここでいう千エキュとは五千フラン)がなければ彼の考える自由や自立はあり得ないということであり、「雇われる」身分についても同様だということだ。若いころから自分が人一倍感受性の強い、特別な人間で

あることを感じとつていた彼は（「わたしの感受性は地上で使われるのではなく、シェイクスピアの登場人物のうゑにことごとく放たれてこそわが天分を増大せしめるだろう」¹⁹）、その自分の活動の自由を保護してくれる防壁として一定の金額がどうしても必要と認識していた。「わたしはずっと前から自分があまりに感じやすく、自分がおくる生活には心を引き裂く数多くの刺々しさがあることを知っている。こうした刺々しさは、一万フランの年金によつて取り払われるだろう。わたしにとつて財産は他人と同じように必要なのではなく、わたしの過剰な繊細さゆゑに必要なのである」²⁰と記すスタンダールは、ある意味で文学的特権者を自負する人間であり、天分を持ち合わせて、かぎりにおいてその自立性を護る経済的支援は正当な要求であると考へてゐることがわかる。「一万フランがあつて、自分の未来の書き物について訴追沙汰がなければ、それこそまさに理想的なわが最上の地位となろう」²¹。

ミシェル・クルーゼは、「貧乏であることは小説的であつてもベイリスト的ではない」²²という。ベイリストの理念はこの点で貴族的であらざるを得ない。近代の市民が得る金銭は原則として労働の対価にはかならないが、スタンダールの理想はかならずしもそうではない。これまで見てきたとおり、年金によるのであれ特権によるのであれ、あるいはメセナによるのであれ、旧体制の芸術家がそうであつたように何らかの経済的庇護が前提になつてゐるのだ。労働の報酬という金銭的拘束から自由になるところにベイリストの理想があり、そこにこそ幸福の端緒がある。

（三）理想化される民衆像と金銭

金に対する関係の希薄さは、別のかたちで表出されることもある。たとえば『パルムの僧院』のフェランテ・パラがそうだ。彼は民衆詩人であり、ファブリスを積極的に助けるが、一方で犯罪者でもある。「死刑宣告をうけた自由主義者の医師でイタリア中を放浪して自由主義の宣伝者としての任務を遂行しているフェランテ・パラについて語ら

ねばならない」と書いたのはバルザックであつた。實際、この詩人は作品のなかで大きな役割を果す重要な人物だが、ここで犯罪者といわれるのはたんに思想犯として当局から追われているというだけでなく、時には追い剥ぎも行うからである。⁽²⁴⁾ただし、自分にとって相応の報酬とみなされる以上のものは奪つたり盗んだりはしない。自身の自由な行動を可能にする最低限の金を、いわば神から授けられる当然の施しであるかのように奪うのだ。詩人は言う、「私は犠牲者の表を作っています。将来何か手にはいつたら、とっただけ返すつもりです。私のような護民官の仕事は危険ですから、月百フランの値打ちは十分あると思っています。だから年に千二百フラン以上とらないことにしています。いや違いました。いやもう少し取ります。本の印刷代も払っていますから」。⁽²⁵⁾

フェランテは「民衆の護民官」を自称し、作者もそのかぎりにおいて詩人フェランテの行為を赦しているように見える。過剰な金銭は批判の対象になるが、自立した、しかも何らかの大義を果すために必要な自由を保証するため金銭は、たとえそれが一時的に犯罪から生ずるものであつても正当化されるのである。

スタンダールが共和主義者であるかのような言説をあちこちに書きつけ、そこには旧体制の貴族を呪詛するかのような記述も珍しくない。こうした点を過剰に評価し、マルクス主義的な批評の流行のもと、この作家を共和主義的文学者の先駆者、『赤と黒』を階級闘争の小説とみなす傾向がきわめて強かつた時代もあつた。その場合、フェランテのような人物は民衆を解放する思想的英雄のように位置づけられやすいが、このような特定のイデオロギーに引き寄せる読解はもちろん訂正されなければならない。われわれがこの人物のなかにみたいのは、金を奪う犯罪者でありながら、金銭に対する欲には無縁であるということ、奪い取る金銭はこの小説家自身が望む年金と同様、けつして過剰ではないこと、そのかぎりにおいて作者の経済観念を反映しているということである。フェランテは民衆の味方であるが、現実の民衆とのまじわりはそれほど描かれない。「民衆の護民官」でありながら、民衆たちの生きる世界から

は超脱しているかのようにみえてしまう。これもスタンダール自身の民衆の捉えかたに由来している。よく引用される「わたしは民衆の幸福のためなら何でもするだろう。けれども、商店の住人と一緒に暮らすくらいなら、毎月一五日間を牢獄で過ごすほうがましだと思ふ」という文章がこの点をもっともよく表現している。アメリカの民主主義に対する心的距離、世論の専横に対する嫌悪などと相俟って、小説家には彼のつぎの世代が自身の問題としてとらえようとしていた大衆や労働者、貧困といった社会的問題にはまだそれほど深く意識されてはいなかった。

とはいえ、政治理念的には近代主義者であり、フランス革命の理念を信奉していたのであるから、その立場からすれば旧体制の貴族やその威光を継承しようとする勢力が旧政治体制を復活させることには対抗せざるを得ない。当然ながらジャーナリズムにおいても自由主義陣営に身を置くことになり、自由、平等は基本的な理念として位置づけられていたはずである。とはいふものの、オペラも解さないような無教養な大衆や民衆に直接接することは耐え難く、嫌悪にも似た感覚を生じさせるものであった。スタンダールにとって民衆はいわば「遠くにあつて眺めるもの」である。筆者はかつてここにツヴェタン・トドロフのいう「エキゾティズム」と同じ構図を見て取り、ロマン主義の一要素として検討したことがある。トドロフはエキゾティズムの構造がもつ本質的な逆説をつぎのように説明した。

エキゾティシズムにとつての理想の役割を果たすもつとも適した候補者はもつとも遠くにあつて、もつとも知られることの少ない民であり、文化である。(中略)他者をよく知るといふことはエキゾティシズムとは両立不能である。だが、一方、他者についての無知は他者をほめたたえることと相容れない。ところが、エキゾティシズムはまさしくそのようなものであろうと望むのである。つまり無知でありつつ「他者を知らずして」ほめたたえようとする望みである。これがエキゾティシズムを構成する逆説である。²⁷⁾

スタンダールの民衆もまた、政治的・経済的に救済されなければならぬ対象でありながら、あくまで「遠景」として捉えられた理念的民衆にすぎない。間近に見いだされる民衆は芸術的洗練も精神の高尚さも理解できない「未開人」であり、品位なき粗野な群衆である。本来ならば対象に近づいて正確に知らなければ適切に評価することができないはずなのに、遠くに置くことよってそれを美化し理想化しようとする。民衆はもつとも遠くにあるときにこそ称賛の対象となるのだ。これはまさにエキゾティシズムの構造といえよう。この点はスタンダールの民主主義に対する意識の位相を読み取るうえでもきわめて重要であろう。

フランソワ・ヴァノステューイズも「ベールは民衆を遠くから見ている」と適切に表現している。²⁹たとえば『赤と黒』の語り手は、ジュリアン・ソレルの行動や周囲との遣り取り、とくにしばしばみられる恋愛における唐突で不器用な反応が社会的な劣等意識に由来することを読者に印象づけようとしながら、他方でこの青年が同じ社会階層に属する父や兄たちとはまったく似ていないことを強調する。³⁰ジュリアンという人物は「農民」「平民」「労働者」と同列の環境に生まれ育っていることを強調するかのように入れて、彼自身はどこかそうした周囲に馴染まず、浮き立っているかのごとく描かれるのだ。身だしなみさえ整えればレナール家の人びとに引けをとらないし、言葉遣いも彼らと異なるところがない。要するに、物語言説はジュリアンの身のこなしや言葉による劣等性を具体化する詳細を一切報告しないのだが、それは「その劣等性が自明だからなのではなく、逆に物語の時間的・空間的世界（デイエジェーズ）に属していないから」である。³⁰読者がジュリアンのなかに、社会的身分のまったく異なるファブリス・デル・ドンゴと共通する部分を感じてしまうのはそのためであろう。

実際、スタンダールの生きた時代、スタンダールのような人間が属していた社会的空間と民衆階級のそれとのあいだには決定的な断層があった。少年アンリ・ベールの敬愛する祖父アンリ・ガニョンはヴォルテール主義者であり、

まさに啓蒙主義的一八世紀人であったが、公の場では鬢をつけていた。祖父とジャコバンの会合に集う人びとの話しかたは根本的に違っていて、かねてから祖父自身も人びとの話しかたを揶揄していたのだが、その会合に出たアンリはそれを痛感するのである。「わたしが愛そうとしたはずのこの人びとがおそろしく下賤に思えた。狭くて天井の高いこの教会はともて灯りが乏しかったが、そこに最下層の多くの女性たちがいた。要するに、その時のわたしも今日と同じだった。民衆が好きであり、彼らを抑圧する者は大嫌いだ。しかし、民衆とともに生きることがわたしにとつてたえざる責苦となるう」³¹。革命のさなか、サン・タンドロレ教会での生の体験なまのなかで得た好悪の感覺は、『アンリ・ブリュラーの生涯』を書いている「いま」においても何ら変わりなく蘇る。ジャコバンの民衆たちは、イデオロギー上の理念においてはアンリ・ベールの仲間であり、したがって「愛そう」と思う対象であるのに、「どうしようもない嫌悪」を催させ、「汚くみえる」³²ものなのだ。近くにみる民衆の姿はそのような汚さや醜さを抱かせるものであり、一方、遠くに置かれる民衆は理念的に捉えられ、かれらを抑圧することは赦しがたい横暴となる。ここに遠近のちがいによって対象の見えかたが根本的に異なるエキゾティシズムの逆説的構図が透けてみえるだろう。そしてこの構えは四〇年の歳月を挟んでまったく変化していない。

言い換えればスタンダールにあって（もちろん彼だけではないのだが）、「民衆」は二種類あることになる。すなわち抽象的に切り出された民衆と生身の具体的存在としての民衆。前者は遠景に位置し、したがって理念的であり、平等という大革命以降の価値観からして当然救いの手を差し伸べられるべき民衆である。一方後者は、その身なり、言葉遣い、身のこなし、礼儀作法などがすべて間近に観察される現実の民衆で、「嫌悪を催させ」³³るような、負の側面ばかりが強調されてしまう存在である。政治的理性が捉える民衆像と審美的感性が捉える民衆像——そのように言い換えてもよい。両者のはざまにあっておそろくスタンダールはこれらの相反する像を調停する必要があった。なぜな

らどこまでも貴族的な感性や審美眼は、民主主義的な政治判断と相容れないものだったからである。

相対立するこれらふたつの民衆像を調停し繋ぐためには、民衆の味方でありながら、他方で高邁な政治的理念と大義を体現する存在がどうしても必要になってくる。おそらくそのために生み出されたのがフェランテ・パラである。観念化され理念化された民衆の姿は、いわばスタンダールの都合によって小説的に造形化され、間近に見る実像に嫌悪を示すのとは逆に、往々にして理想化される。こうして民衆を遠くに置きつつ観念化・理想化することによって、民衆の味方であるべきという心情と、実際の民衆の近くで覚える耐え難い嫌悪とを調停し、その自家撞着的構造を解消するのである。自己と民衆のあいだにある越えがたい断絶を、民衆から現実性や具体性、言い換えれば感性的に捉えられる個々の事實的属性を剥ぎ取り、自らの想念が造形する観念的に（あるいは創造的に）純化された民衆像へと生まれ変わらせることによって、乗り越えようとするのである。その理想的典型がまさしくフェランテ・パラなのだ。³⁴

エキゾティシズムの逆説的構図がロマン主義に必然的に宿るものである以上、フェランテという存在もロマン主義的人物である。フェランテの盗む金銭が過剰でなく、正当化されるものであることが明言されなければならないのと同じように、過大でも過少でもない六千フランの年金は、スタンダール自身の芸術的自立性をぎりぎりのところで担保する一方、法外に貴族的とも映らない金額として編み出されたものである。小説家にとってみれば「一九世紀という文明化された」時代に残された唯一の理想的な経済的選択であった。

（四）生産と消費

六千フランの年金が理想的な生活資源だとするスタンダール独自の経済観念は、彼が一九世紀初めの経済学理論を

どのように受容したのかという問題とも深く関係している。アダム・スミスの古典派経済学を土台にしてフランスでもジャン・バティスト・セーを中心に自由主義経済思想を推し進めていたが、スタンダールもかなり早くから彼らの経済学を熱心に研究していた。しかしながら、ある時点を境に急に熱が冷めたことを宣言し、少なくとも表面的にはこの探求に終止符を打った。実際にはこれ以降も経済への関心は少なからず続いたと思われるが、ここで注視したのは彼が経済学への情熱を失ったとされる理由についてである。

研究者のあいだでは、スタンダールの経済学への関心が一時的なものでしかないといふと久しく考えられていた。その論拠としてもちだされるのは、「不明確な、あるいは相矛盾する点」をこの学問に見出したという『アンリ・ブリュラー』に記された文章、一八一八年のマレスト宛の手紙にみえる「わたしはこの学問を放棄する」という宣言などである。これらを根拠としてデル・リットは、一八一〇年の夏を頂点に、その後も散発的に湧くスタンダールの経済学への興味は一過性のものにすぎないと結論づけたのだが、よく観察すれば、フランス古典派経済学の父ともいふべきセーの著作を批判的に読むことによつて、自身の考えとの違いを鮮明に認識したことが経済学研究を放棄した直接的な原因であることがみえてくる。

少し時を遡れば、二一歳ごろからエルヴェシウスやトラシーを読み、「精神を心理へと導く術の研究」として感覺論やイデオログの考えを学ぶことから出発し、すぐあと（一八〇五年）にアダム・スミスも読んでいたことは日記や妹への手紙からも確認できる。一八〇六年ごろにはモンテスキューの『法の精神』のなかの奢侈についての議論にも考えを巡らせている。さらに一八一〇年にマルサスを見出すことで、ふたたびアダム・スミスを読み返し、とくにセーの『経済学概論』については厳しい判断を下すことになるのである。このように、彼の経済学への関心はかなり早くからあった。

一八一〇年、國務院検査官に任命されたアンリ・ペールは、人生でもっとも華やかな一年を送ることになるのだが、この年の八月から九月にかけての一時期を中央学校時代からの友人ルイ・クロゼと経済学の勉強に打ち込んだ。当時この友人がいたのはオーブ (Aube) 県のプランシー (Planchy) ³⁹⁾ で、日常生活に何かと邪魔の入るバリでの生活に倦みつつあったペールは平安を求めてこの地にやってきたのである。ここで彼は野心的な計画を考える。セーに反論する本を書こうというのだ。もちろん実現することはなかったが、その断章は残されていて、本のタイトルまで考えられていた (『人口と幸福に及ぼす富の影響』 (Influence de la richesse sur la population et le bonheur) はそのひとつ)。これらの断章は Cercle du Bibliophile 版全集の第四五巻 (『雑録 I』) に「経済学概論」という名のもとに収められている。⁴⁰⁾

さて、セーをはじめとする古典派経済学の所論においてペールがどうしても賛同しえなかったのは、いずれも経済の基本を「生産」にしていることだった。一方、ペールの視点はつねに「消費者」の側にあった。さきほど挙げたセーへの反駁本のタイトルにもあきらかなように、経済の捉えかたの原点が富と人びとの幸福の関係にあり、この時期の幸福へのアプローチは多分に功利主義の議論に導かれていた。すなわち、彼がエルヴェシウスから読み取った要諦のひとつは、人間の幸福は快感原則に従うというものである。その後ベンサムへと読書を広げていったのは当然の成り行きといえるが、スタンダールの独自の視点は、幸福の原点である快楽が消費に結びつくのに対し、生産はむしろ苦痛に結びつくと考えていたことであろう。したがって、生産を中心に経済の仕組みを考えることに深い違和感をおぼえていたのである。

経済学などの著述家も、目指しているのは生産させ、生産物をためることばかりで、けっして消費すること

はない。彼らは幸福というものを考慮に入れていない。もつとも生産を促進するものが消費から帰結する喜びであることを彼らは忘れてゐる。セーはこの不備に陥つてゐる、二卷、一七六。これら諸氏を打ち負かすこと。

かくしてわたしは、自分のテーマを考えるための新しい、さらには完全に理にかなつたやりかたを見つけたのだ。⁴²

セーの理論のなかでもつともよく知られてゐるのは、「販路法則」と呼ばれるものである。簡単に言えば、これは総供給と総需要は等しいという前提にたち、供給こそが需要を生み出すという考えで、「セーの法則」ともいわれてゐる。かりに一時的に需要が不足して供給過剰になつたとしても、販路拡大の努力などによつて不均衡は解消されるとした。それを可能にするために、自由貿易や競争、事業上のさまざまな制約の解除といった自由主義の原理が主張された。セーのこの理論は二〇世紀になつてケインズらによつて批判されることになるが、古典派経済学では長いあいだ中心的な考えかたであつた。供給すなわち生産こそが経済の基本であり、需要すなわち消費は従属的なものとして位置づけられてきたのである。たとえばセーは、「年間二〇億の価値しか生産できないような国家が、毎年資本から超過分一〇億を引き出さないかぎり、同じ期間に三〇億分のを買う、あるいは消費することはできない。製品に販路を開く最良のやりかたは、販路を増やすことであつて、壊すことではない」⁴⁵という。こうして生産を増強していくことによつて消費も伸びてゆき、経済活動は刺激され発展する。消費は原因ではなく結果なのだ。⁴⁶「生産を促進することは新たな販路を広げることなのである」⁴⁷。ペールがしばしば参照してゐるのはまさしくこの主張が展開されているページで、それは、さきほど引用した断章に「二卷、一七六」とあつたことからわかる。「もつとも生産を促進するものが消費から帰結する喜び」と書くスタンダールと真逆の主張をここでセーが展開していることが見て取

れよう。幸福に向き合うためには消費に由来する喜びについて検討すべきだと考えるスタンダールにあって、セーの販路の法則は反論すべき格好の対象と映ったにちがいない。⁽⁴⁸⁾

ところで、スタンダールが生産を経済の中心に位置づけられない理由を考える際、彼自身のうちにある芸術家的労働観とアングロ・サクソンの労働倫理観とが折り合わなかったという点にも目を向ける必要がある。一般にロマン主義時代以降、多くの芸術家にとって、自分たちのアイデンティティは一般労働者のそれとは根本的に異なる地平にあると考えられるようになった。すでにみたように、ものを書くスタンダールの精神のありようが相当に貴族的であり、一八世紀的であったのも、自分が文学をやる人間であるという自意識と不可分であり、一般労働者とのあいだに明確な一線を引いていたからである。もちろんこうした芸術家的特権意識はそれ以前からあったが、一九世紀に入って中産階級の労働者やさらに下位の労働者階級が前景化してくるにつれて、この意識はいっそう研ぎ澄まされていく。たとえばヴィニーは『チャッタートン』の序文で、思想に携わる人間を「文人 (homme de lettres)」⁽⁴⁹⁾「大作家 (grand écrivain)」⁽⁵⁰⁾「詩人 (poète)」の三種に分け、その「詩人」についてこのように述べる。「彼が自身の芸術において何かをなすためには何もしないことが必要なのだ」(il a besoin de ne rien faire, pour faire quelque chose en son art)。この文章は芸術家の創造が一般労働者の社会的時間とは別の次元にあることを雄弁に物語っている。ヴィニーは続けて、詩人にとって自身の魂のなかにゆっくりと形づくられていく調べ (accords) を聴くためには、日々のどんな有用なこともせずにいることが必要なのだとも言う。この調べは現実の規則正しい仕事の雑音によって中断され、かならずや掻き消されるからだ。スタンダールがヴィニーほどの芸術家精神をもっていたかどうかは措くとして、六千フランの年金によってどこからも干渉されない自由で自立した最低限の世界を築こうとしたことは確かである。それは同時に近代的な労働条件から自由になることを意味している。

アングロ・サクソンの（あるいはプロテスタント的）労働倫理観や経済至上主義的な価値観は、本来スタンダールの美学に反するものである。もちろん、彼がよって立つ足場はつねに自由主義陣営の側にあつたわけだが、『産業者に対する新たな陰謀について』における反サン＝シモン主義的立場があきらかにしているように、経済が個人の倫理や審美的判断に影響を及ぼすようになると、「自由」の名において断固としてこれを拒否するのである。

ところで、イギリス人などアングロ・サクソン系の人びととフランス人のあいだには労働適性においてかなりの違いがあるという認識は、かなりひろく共有されていた。セー自身、『経済学概論』のなかで、イギリス人とフランス人を比較してつぎのように言っている。「イギリス人は、美的センスにかかわる美術、建築、絵画、彫刻においてはフランス人ほど首尾よくできないが、工芸美術で有効に使われる形、デッサン、色彩の選択においては一般にフランス人を凌駕している。かれらはフランス人よりも、獲得した知識を生活の必需品に応用するこの産業分野に精通しているのだ」⁽⁵⁰⁾。イギリスで生産された製品が他の国のものより使いやすく、結果としてよく売れるのは、このようなイギリス人の適性が功を奏しているからであつて、「真に産業が完成するというのは、ある特定の部分で極度に洗練されるということではなく、最大多数の人びとの手に届く製品を普及させることであり、それらをさらに改良し、安い価格によつていつそう共有されるものにするのである」⁽⁵¹⁾。スタンダールもまた、フランス人とは異なるイギリス人の適性をこのように考えているかにみえる。彼によれば、「一日の消費をもつとも少なく抑え、多くの品に関してヨーロッパの製造者になる」のがイギリスの労働者であり、彼らの商業および労働の才は産業化されてゆく世界の近代性そのものなのである。消費を極力抑え、生産に奉仕する労働は、儉約と勤勉を尊ぶプロテスタント的労働観そのものであつて、産業革命をいち早く実現した国にふさわしいが、快樂主義的なイタリア讚美者の眼にはいかにも単調で陰鬱なものに映つてしまう。人間の快樂や幸福は生産労働の側にあるのではなく消費の側にあるのだという視点に立て

ば、産業主義が進行していく一九世紀は、誠実、勤勉、儉約を理想とする重々しい労働の軛に人間を従わせる時代であり、ますます暗く陰鬱な空気の支配する環境へと馴化させていく過程なのである。

さらに当時のイギリスの労働環境の影響もある。スタンダールはたびたび工業化の進んだイギリスの労働条件の悲惨さを書き記している。「わたしはすぐさまイギリス人労働者の一八時間労働の滑稽さを感じた。完全にぼろをまとったイタリアの貧者でもずっと幸福に近いところにいる」⁽⁵³⁾。ここでもイギリス対イタリアといういつもの比較もちだしながら、産業先進国イギリスを揶揄する。イギリス人は「労働の不幸な奴隷」であるという記述もある⁽⁵⁴⁾。「週に一二時間もしくは一五時間の労働がないと幸せになるのは難しい」が、「日に六時間以上の労働は幸福を縮減させる」⁽⁵⁵⁾と考えていた彼にとってみれば、イギリスの労働環境は到底容認できるものではない。ここからもスタンダールのセー批判は理解できるだろう。「生産」をもって経済をみる思想の弊害を直感的に嗅ぎ取ったのである。生産中心の経済学は、富を生みだす理論にはなるが、人びとを奴隷のような労働に縛りつけ、本来の喜びや幸福を遠ざけてしまう。クルーゼも言うように、そのような経済活動はつまるところ人間から自由を奪うものでしかない⁽⁵⁶⁾——このイタリア讃美者はそう主張するのである。

スタンダールが経済学の研究を放棄したとされるのは、彼が「生産」という一点に重きを置こうとする古典派経済学の理論がどうしても肌にあわなかったからである。産業革命をへてますます工業化していくこの時代、資本主義経済の発達とともに個人の経済的才覚によつてのしあがろうとするブルジョワ精神が一般化していくなか、スタンダールの「適度な」年金への執着や現実とはかなり隔たった労働観は、やや古い、いくぶん貴族的で折衷的な価値観を帯びたものにみえる。小説の主人公たちから（おそらく意識的ではなく）金銭の臭いを消してしまったのも、こうした価値観が影をおとした結果と推測されるのである。

(五) 欲望の経済学（むすびに代えて）

ところで、もともとフランスの産業はラグジュアリー産業に特化した手工業生産を中心としており、近代的な工業生産に転化しにくい性質をもっていた。このことはさきに触れたセーのフランス人とイギリス人の適性の違いとも関係している。やや巨視的な見方をすれば、フランスの産業は宮廷および貴族階級で必要とされる装飾品や贅沢品の製造によって支えられてきたところが大きく、「最大多数の人びとの手に届く」日用品の生産とは方向性が異なる。今日でも、フランスといえばオート・クチュールや香水、宝飾品、金銀食器、ブランド性の高い食材や格付けされたシャトー・ワインなど、つねに「贅沢」や「奢侈」という言葉がまわりつくイメージがある。人間の消費は、一般的な必需品からのみ成り立っているわけではなく、ヴェブレンのいう衛生的欲望に動かされて消費する製品もある。フランスの産業は伝統的に後者に依拠していた部分が大きかった。ところがスタンダールの生きていた一九世紀の前半は、産業革命を経験して以降、こうしたフランス型の手工業がしだいに近代的工業生産へと変化しはじめた時期であり、バルザックもこのような変化を敏感に察知していた。一八三九年刊行の小説『ベアトリックス』の冒頭には、「……」ここ三〇年来、こうした古い時代の肖像は消えはじめ、珍しくなっている。昨今の産業は大衆のために働いているから、仕事が生産者にも職人にも等しく個人的であった古い芸術の創造物をいまや破壊しようとしている。われわれには製品はあるが、もはや作品はないのだ」という文章もみられる。もともと、フランスでは人間の臭いのする産業形態を求める運動がこのあともなお残り、卓越した製品と大量生産による製品のあいだの適切な関係をずっと追い求める動きが消え去ることはなかった。その意味で、イギリスなどにくらべて、奢侈の市場形成力に頼る部分が大きかったといえるだろう。

このようなフランスの産業とイギリスのそれを考え合わせるとき、ヴェルナー・ゾンバルトの資本主義発達論を想起しないわけにはいかない。周知のとおり、これはマックス・ヴェーバーの主張と対比させてよく引かれる論だが、「生産史観に対して消費史観ないし流通史観、あるいは禁欲・節儉史観に対して欲望史観」と言い換えることもできる⁽⁸⁸⁾。周知のとおり、ヴェーバーは宗教改革以降、プロテスタントの禁欲、儉約、勤労の倫理からどのように近代資本主義の精神が誕生したかを問い、資本蓄積の過程を追ったのに対し、ゾンバルトはむしろ奢侈・贅沢こそが近代資本主義を誕生させるうえで大きな役割を果たすと主張する⁽⁸⁹⁾。また女性の重要性に注目した点も特徴的だ。サロンなどに出入りする流行に敏感で洗練された女性とのまじわりは、いっそう洗練度の高い流行を生じせしめる。このような女性との恋愛は贅沢な服飾や装飾品への嗜好を強化し、上層階級がこの時代に要求されるようになったエレガンスや洗練、上品さといった価値が消費への欲望を強く刺激することになる。それが結果として経済を動かす原動力になって、奢侈が経済を推進し活性化すると考えた。つまり「奢侈の市場形成力」⁽⁹⁰⁾を強調したのである。

後世の社会学者や経済学者の理論に当てはめてもあまり意味はないが、スタンダールの立ち位置はゾンバルトの考えに近い。いうまでもなくゾンバルトの主張は王侯・貴族階級の存在が前提であり、人間の快樂原則に立っている。これまでみてきたように、消費と快樂に目を向けようとする小説家には生産をベースにしたイギリスやアメリカの資本主義的思考はなじまなかった。経済史的にみれば、産業革命後の工業化の前段階とされるプロト工業体制(système proto-industriel)⁽⁹¹⁾の位置に留まり続けているといえるかもしれない。したがって、すでに述べたように、われわれからすればやや古さを感じさせるのも当然であろう。しかしこのことは、それだけ人間の欲望と幸福を真摯に眺めていた証左であるともいえよう。

註

- (1) Honoré de Balzac, « Études sur M. Beyle », in Stendhal, *Œuvres romanesques complètes III*, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2014, pp. 653-654.
- (2) ふたりの小説家の体質の違いについては、拙著『スタンダールのオイコノミア―経済の思想、ロマン主義、作家であること―』関西大学出版部、二〇一七年、二九九―三〇九頁でも論じた。
- (3) 六千フランにこころはニシエル・クルーゼを論じており、示唆を得た。Michel Crouzet, *Stendhal et le désenchantement du monde. Stendhal et l'Amérique II*, Classiques Garnier, 2011, pp. 510-517.
- (4) Lettre à Pauline Beyle du 8 nov. 1806, in *Correspondance I*, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1968, pp. 331-332.
- (5) *Vie de Henry Brulard*, in *Œuvres intimes II*, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1982, p. 569.
- (6) « Notices autobiographiques », in *Œuvres intimes II*, p. 969.
- (7) *Ibid.*, p. 974 et p. 979.
- (8) Lettre à Mareste du 17 janv. 1831, in *Correspondance II*, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1967, p. 215.
- (9) *Vie de Henry Brulard*, p. 948. その箇所は「最高の幸福は、百ルイの年金をもらってパリで本を書けることだ」とも言っている (*ibid.*, p. 859)。
- (10) *Ibid.*, p. 948.
- (11) *Ibid.*, p. 859.
- (12) *Ibid.*, p. 948. 「『マニッタ』は七千フランで大いに安楽だ」という日記の記述もある (*Journal, Œuvres intimes II*, p. 104)。
- (13) *Paris-Londres*, Stock, 1997, p. 328.
- (14) *Les Privilèges*, in *Œuvres intimes II*, p. 982. スタンダールを読み解くうえできわめて重要な文章と位置づける研究者も多いなか、筆者は小説家の一時の慰みにすぎず、あまり過剰に評価すべきではないと考えているひとりだが、それでも金銭に関わる記述は見逃すことはできない。
- (15) *Ibid.*, p. 984.
- (16) *Ibid.*, p. 984.

- (17) *Ibid.*, p. 988.
- (18) *Journal littéraire III*, in *Œuvres complètes*, Cercle du Bibliophile, 1967-1974, t. XXXV, p. 361.
- (19) *Journal* (11 février 1805), in *Œuvres intimes I*, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1981, p. 212.
- (20) *Ibid.*, p. 212.
- (21) *Vie de Henry Brulard*, p. 921. 芸術家的感性が刺激されると金銭的想念は消失するという感受性は「ローマ、ナポリ、フェレンツェ」でも語られており、ミラノでの記述では、「[...]ドウオーモと版画をみたことで、わたしは美にいつそう感じやすくなり、金銭的利益や夢を破る悲しいどんな想念にもつこやう鈍感になった。こんな生活すれば二百ルイの年金ですぐにでも幸福になれる」²²は確かだ²³。(Rome, Naples, Florence (1826), in *Voyages en Italie*, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1973, p. 352.)
- (22) M. Crouzet, *op. cit.*, p. 512.
- (23) H. de Balzac, « Étude sur M. Beyle », *op. cit.*, p. 642.
- (24) この人物について細かく検討した研究に、井出勉『「バルムの僧院」における《アウトロー》フェランテ・パラ』(『名古屋造形大
学紀要』第三三号、二〇一七年、八一〜九〇頁)がある。
- (25) *La Chartreuse de Parme*, in *Œuvres romanesques complètes III*, *op. cit.*, p. 471.
- (26) *Vie de Henry Brulard*, p. 778.
- (27) Tzvetan Todorov, *Nous et les autres. La réflexion française sur la diversité humaine*, Seuil, 1989, p. 356. ツヴェタン・トドロフ『われわれと他者 フランス思想における他者像』小野潮、江口修訳、法政大学出版局、二〇〇一年、四一六〜四一七頁参照。
- (28) François Vanoosthuysse, *Le Moment Stendhal*, Classiques Garnier, 2017, p. 203.
- (29) *Ibid.*, p. 204.
- (30) *Ibid.*, p. 205.
- (31) *Vie de Henry Brulard*, p. 686.
- (32) *Ibid.*, p. 687.
- (33) *Ibid.*, p. 622.
- (34) 民衆、あるいは民衆側に立つ英雄的存在が創造的に純化され、小説的に理想化される過程には、言うまでもなくカルトウーシユ

やペンドランなどの半ば神話化された義賊の伝統も関係している。井出勉、前掲論文、八五～八六頁。

- (35) *Vie de Henry Brulard*, p. 810.
- (36) *Correspondance I*, p. 921.
- (37) Victor Del Litto, *La vie intellectuelle de Stendhal. Genèse et évolution de ses idées (1802-1821)*, PUF, 1962, p. 390. フロイト・リットはその後、ス・ク・ソンの主張に「ニュマンズをつけて」、スタンダールにおける経済思想の重要性を見直している。Cf. V. Del Litto, « De l'étude de l'économie politique à la querelle de l'industrialisme. Notes inédites », *Stendhal Club*, no 61, Editions du Grand-Chêne, 1975, p. 3.
- (38) *Journal*, 19 mars 1805, p. 310. Lettre à Pauline du 19 mars 1805, *Correspondance I*, p. 187.
- (39) クロゼは一八〇六年から同県の土木局に赴任しており、水運とくにフランシーの開門の建設を担当していた。
- (40) *Journal*, août-sept. 1810, p. 625.
- (41) *Mélanges I. Politique, Histoire, Economie politique*, in *Œuvres complètes*, Cercle du Bibliophile, 1967-1974, t. XLV, pp. 111-138.
- (42) *Ibid.*, p. 123. 生産を中心に据えるのはこのあとも長く経済学を中心となる。「それまでの経済史研究の焦点は、何らかのカタチで「生産」にかかわるものであった。経済史家の関心は、資本形成や経済成長にあつて、それらをもたらす技術革新や技術移転、総じて成長論や産業構造の分析といったマクロ的な視点も、個々の産業や企業の経営的な歴史も、すべてモノを作るという一点に焦点をあてたものであった。」草光俊雄、真嶋史叙監修『欲望と消費の系譜』NTT出版、二〇一四年、三頁。
- (43) Jean-Baptiste Say, *Traité d'économie politique*, Crapélet, 1803, t. I, ch. 15.
- (44) いわゆるケインズの「有効需要の原理」(『雇用・利子および貨幣の一般理論』)は「国民所得は経済全体の総需要(有効需要)によって決定されると説くもので、供給が需要を生むとしたセーとは逆の考えである。
- (45) J.-B. Say, *op. cit.*, t. II, p. 176.
- (46) *Ibid.*, p. 175.
- (47) *Ibid.*, p. 177.
- (48) 最近になって、スタンダールの経済思想を功利主義との関係とあわせて包括的に論じる研究がいくつか注目されるようになってくる。最初に網羅的に論じたのがミシェル・クルーゼバ(*Stendhal et le désenchantement du monde, op. cit.*)。さらに古典派経済学、

- とくにヤーノの關係を深く議論しているのがクリストフ・レフエである (Christophe Reffait, *Les Lois de l'économie selon les romanciers du XIXe siècle*, Classiques Garnier, 2020)。リリジの記述をレフエがかなりの部分を依拠している。ジュジュ pp. 270-273.
- (49) Alfred de Vigny, *Chatterton*, « Dernière nuit de travail du 29 au 30 juin 1834 », in *Œuvres complètes. Théâtre II*, texte établi par Fernand Baldensperger, Conard, 1927, p. 235.
- (50) J.-B. Say, *op. cit.*, t. I, p. 133.
- (51) *Ibid.*, p. 138.
- (52) *Mélanges I. Politique, Histoire, Économie politique, op. cit.*, p. 295.
- (53) *Souvenirs d'Égoïsme*, in *Œuvres intimes II*, p. 482.
- (54) Cf. V. Del Litto, *En marge des manuscrits de Stendhal. Compléments et fragments inédits 1803-1820*, PUF, 1955, p. 295.
- (55) *Mélanges I. Politique, Histoire, Économie politique, op. cit.*, p. 296.
- (56) M. Crouzet, *op. cit.*, p. 357.
- (57) H. de Balzac, *Beatrix*, in *La Comédie humaine II*, Gallimard, coll. « Bibliothèque de La Pléiade », 1976, p. 638.
- (58) 内田日出海「訳者まえがき」ルイ・ネルジュロン『フランスのラクジュアリー産業 ロマネ・コンティからルイ・ヴィトンまで』文真堂、二〇一七年、iii頁。
- (59) ヴェルナー・ゾンバルト『恋愛と贅沢と資本主義』（金森誠也訳）、講談社学術文庫、二〇〇〇年。とくに第五章「奢侈からの資本主義の誕生」参照。
- (60) 内田日出海、前掲「訳者まえがき」、iv頁。
- (61) Louis Bergeron, *Les industries du luxe en France*, Odile Jacob, 1998, p. 9.